

英 語

笠松 雅美 木谷 崇 乗富 章子
基村 俊成 古田 正樹 岩崎 誠
藤本 文乃

1 本校の英語

新学習指導要領
外国語活動の新設

今回の学習指導要領の改訂で「外国語活動」が新設され、目標が明示された。この目標は3つの柱から成り立っている。

外国語を通じて

- ①言語や文化について体験的に理解を深める
- ②積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る
- ③外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる

この3つの柱を踏まえた活動を通して、コミュニケーション能力の素地を養っていくことが「外国語活動」の目標であるとされた。

一方、本校の英語への取り組みは、14年間に及ぶ。小学校という発達段階で指導すべきは何であるかを模索しながら試行錯誤をくり返してきたが、簡単な英語を使いながら、コミュニケーションを行う楽しさや意義、人とかかわることの大切さを感じられるようにすることが重要であるととらえ、英語の目標を次のように定めて実践を重ねてきた。

英語の目標

コミュニケーション活動を通して英語への関心を高め
聞くことや話すことなどのコミュニケーション能力の基礎を培う

「コミュニケーション
能力の基礎」の三つの
側面

*1 本校研究紀要
第60～62集参照

ここでいう「コミュニケーション能力の基礎」には三つの側面^{*1}があると考えている。それは、「コミュニケーションの基礎としての英語」「教養としての英語」「他の外国語（他言語）を学ぶ基礎としての英語」の三つである。

本校が重ねてきた英語の実践は、今回の学習指導要領で示された目標・内容とも重なるところが大きいととらえている。また、本校の英語は全学年で実施する「必修」の英語として、独自のカリキュラムを作成している。低学年は隔週、中学年以上は毎週1時間を英語として設定し、その全てを学級担任（HT）と外国語教師（ALT）とのTTで行っている。なお、本校が低学年から英語を実施しているのは、コミュニケーション能力の基礎を培う上でより効果があると考えたからである。発達段階からみてもネイティブの発音を聞き分けるのは低学年の方が長けている。英語という言語の学習に抵抗なく取り組んでいこうとする意欲も高い。このような実態から、6年間でゆとりをもって英語への興味・関心を高めていこうと考えている。高度な英語技能を詰め込むための6年間では決してない。

以上のような考えをもとに、本校の研究テーマにも添って実践を重ねている。

2 英語における知識創造

知識創造のとらえ

英語における知識創造を以下のようにとらえる。

基本的な表現にくり返し接することで およその意味がわかり
その表現を使って コミュニケーションしようとする営み

相手への意識や意図

英語の授業では「基本的な表現にくり返し接すること」が学習の基本である。ここで述べる基本表現に接するとは、ALTやHTが子どもに向けてくり返し基本表現を聞かせることはもちろん、子ども相互が活動の中で行う基本表現を聞き合うことも意味している。このように、基本表現にくり返し接することで、日本語に訳して説明されなくても、子どもは基本表現の意味を感覚的につかむことができるだろう。こうして、単なるおうむ返しで機械的に行っていた基本表現の練習が相手への意識や意図を伴った言語として発話されるようになり、英語でのコミュニケーションが成立する素地ができるのである。

3 知識創造の力を育むために

(1) かかわりの「場」のデザイン

自然なコミュニケーションの場

ALTとHTの役割

自然なコミュニケーションの場づくりをしていく。例えば、“Is this a pencil?”という表現を扱う際、えんぴつを持って友だちに「これはえんぴつですか」とたずねる会話は、日常ではありえない。そのような非現実の設定を廃し、できるかぎり自然なコミュニケーションができるような場づくりを心がけていく。

また、ALTとHTの役割をはっきりと定め、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる観点から、ALTは主に英語のインプットを受け持つこととし、HTはALTと子どもあるいは子ども同士をつなぐ役を担い、責任をもって授業プランを立案していくこ

5 実践例 —1年—

テーマ いろいろ たんざく

(1) 本テーマにおける知識創造

学んだ7色 (red yellow pink green purple orange blue) を使って 願い事を書きたい短冊の色を ALT や HT に英語で伝える営み

本テーマは、自分が願い事を書きたい短冊の色を英語で伝えて受け取る活動である。自分の使いたい色を“___, please.”を用いて ALT や HT に伝える。

子どもはこれまでに英語で7色 (red, yellow, pink, green, purple, orange, blue) の表現を学んだ。色カードや歌、ゲームを通して繰り返し色の表現に触れ、視覚的・体感的に色の表現を習得した。よって ALT や HT が英語で言った色が何色を示しているかは分かる。しかし、自分が思い浮かべた色を相手に英語で伝える経験はしていない。聞く活動が主だった今までと違い、今回は自分で欲しい色を言うためとまどう姿も見られるだろう。

本時ではまず色カードや『Sing A Rainbow』に合わせて色の表現についてふり返りをする。学んだ色を歌にのせて楽しく繰り返し発話することで色の表現について再確認する。次に七夕の時期にちなみ、短冊に願い事を書く活動を行う。その際、自分の欲しい短冊の色を ALT や HT に伝える。この時に自分の思い浮かべた色を英語で相手に伝える経験をし、英語で伝えられた喜びを実感する。また伝える時には、色のみを言うのではなく、please を付けて伝えたり、渡してくれた相手に“Thank you.”を言ったりすることを学ぶ。これによって相手意識を持って英語でも話そうとする素地を養う。

(2) 知識創造の力を育むために

① かかわりの「場」のデザイン

七夕の時節での授業であることを生かして短冊を書く活動を設定する。これにより子どもが自然に活動内容を理解し意欲を持てるようにする。そこで7色の短冊の中から欲しい色を ALT や HT に伝えて短冊を受け取る場をデザインする。欲しい短冊を受け取るために、子どもは意欲的に今までに学んだ色を想起し相手に伝えようとする。自分が欲しい色を伝え実際に手にした時に、色の表現についての知識が正しいか確認することができ、子どもは自分の知識をさらに確実にできる。

② 「かかわり」の活性化

色の表現を学ぶ際『Sing A Rainbow』に合わせて7色を繰り返し発音する。歌のリズムやイントネーションに繰り返し触れる中で楽しく色の表現を学ぶ。ALT や HT に欲しい色を伝える時にも、この共通の歌を思い出しながらペアになった友達と教え合い自分の欲しい色を伝える。

③ プロセスの自覚

授業の最後に自分の活動についてふり返る場を設定する。その際、3つの観点（「聞く」・「発話する」・「かかわる」）を設ける。一つ目、二つ目の観点では色の表現を使って、聞いたり話せたりしたかをふり返り自分の英語での学びを実感する。そして三つ目ではただ色を言うだけでなく相手に伝えようとしていたかどうかをふり返り、今後も継続して相手意識を持てるようにする。

(3) 「活用する姿」をめざして

これまでに子どもは色の英語での表現を聴いて何色かを分かる学習をした。本時における活用する姿とは、その学びを生かして自分で欲しい色を相手に伝える姿ととらえる。

まず、色の表現を聞いて分かるための手だてとして、使う色の表現は7色に精選する。歌に合わせて色をさし示したり、色カードをあげたりしながら繰り返し練習する。その中で英語の表現に慣れ親しみ、色の表現を確実に活用できる知識とする。次に、ALT 対 HT の示範→ALT 対子ども全体→ALT 対子ども一人というように徐々に1対1での対話に近づけていく。これによって自然に個の発話へとつながり活用する場面を明確にとらえられる。さらに本テーマで初めて ALT と1対1で話す子どもが多いという実態を考慮して、ペアで欲しい短冊の色を伝えに行くことにする。ペアで協力しながら活動することで英語への抵抗感を持たずに色の表現を発話へとつなげられるようにする。

(5) 授業の実際と考察

① 知識創造の力を育むために

最初に本時に至るまでに採ってきた手だてについて考察し、子どもがどのような状態で本時を向えたか述べる。これによって知識創造の力を育むための考察とする。なお学んだ内容は1回目「ALT との出会い」、2回目「英語での挨拶・自己紹介」、前時となる3回目は「色」であった。子どもは学びを重ねるごとに英語への興味・関心を膨らませてきた。この間、知識創造の力を育む重要な入門期であるため、子どもが英語をしっかりと聞いて発話できるように子どもの実態をふまえながら以下の3点に留意して授業を行った。



写真1 ALTと1対1で自己紹介

ともだちの なまえを しっかり きけたよ	 よくできたよ できたよ もうすこし
じぶんの なまえを えいごで はなせたよ	 よくできたよ できたよ もうすこし
ともだちと えいごで あいさつできたよ	 よくできたよ できたよ もうすこし

資料1 自己紹介の学習でのふりかえり用紙

三つ目は、ふりかえりの場の設定である。子どもは3つの観点（「聞く」・「発話する」・「かわる」）で学びをふり返った（資料1）。最初は自分があてはまると思う絵に丸をつけただけだったが、徐々に楽しかったことや難しかったことを文章でふり返るようにしてきた。その結果、色の授業のふりかえりでは「いろいろな色があるので、まちがえずにゲームをするのが難しかったです。けれどもおもしろかったから、何回も（色を）言ってみたかったです。」などの記述も見られた。これによって子ども自身が英語の時間に何を学び、何に難しさを感じたか自覚していると考えられる。しかしこのような子どもはまだ少ないため今後もふりかえりの場の継続が必要である。基本表現に繰り返し触れ、相手意識を持って発話し、自分の活動をふりかえるという授業展開を毎時間経験することも知識創造の素地を養うことにつながるだろう。

以上のような学びを経て本時に至ったのである。本時における知識創造は、自分の学んだ色の表現を使って自分が願い事を書きたい短冊の色をALT（HT）に伝える営みである。前時には7色が歌詞に出てくる歌『Sing A Rainbow』を歌ったり、Color Basketゲームをしたりする活動しながら7色を聞いて分かる学習をした。本時では、その学びを活用して全員が欲しい短冊の色を発話できた。よって本時では知識創造の営みが見られたといえる。

② 「活用する姿」をめざして

本時では特に「活用する姿」を通して知識創造の充実をねらった。色の表現について聞いて分

一つ目は、発話する必然性を持たせることである。例えばALTに自分の名前を伝える場のデザインによって、“My name is ___.”という基本表現を学んだ。ただ練習するだけではなく、明確な目的意識を持たせたのである。これによって子どもは一人でALTやHTに自分の名前を発話できた（写真1）。

二つ目は、体の感覚（体感覚と聴覚）を使って学ぶことである。例えば『Hello song』を歌いながらお互いが向かい合って動作化し、挨拶の表現を練習したり英語の発音を楽しんだりした。歌のリズムに乗せて発音することで英語のリズムに慣れ親しむと同時に友達と一緒に英語を楽しむ姿が見られた。

また、聴覚を十分に使う活動としては、ALTとHTの発音を比較させた。HTが日本語でパープルと発音し、ALTが英語でpurpleを発音し、両者の違いを比較したのである。この活動によって英語の発音に着目する姿をねらった。その結果、子どもはALTの発音をよく聞くようになり、より英語らしい発音を自分でもしようとする子どもが増えた。「〇〇の発音が少し難しかった。」という授業後の子どものふりかえりからも、子どもが日本語と英語の発音の違いに気づき何とか近づけようとしたと分かる。

かることを自分の思いの発話へと活用したのである。そのために以下の3つの場面を設定した。

ア 英語を聞いて色の表現を確かめる場面

イ 段階的に発話する場面

ウ ペアでALT (HT) に伝えに行く場面

この3つについて子どもの姿をもとに考察する。

ア 英語を聞いて色の表現を確かめる場面

本時では前時に学習した7色 (red,yellow,pink,green,purple,orange,blue) を扱った。この7色は子どもが日常生活でも耳にしている表現が多かった。また、前時で一度学んでいるため、英語に不安を感じている子どももあまり抵抗感を感じずに活動に参加しようとする意欲を持った。

最初に前時に学んだ7色の表現を想起するためにALTとともに『Sing A Rainbow』を歌った。その際、色カードを持った7人が前に並び、歌詞に自分の持ったカードの色が出てきたらカードを挙げる活動をした(写真2)。色カードを持った子どもは自分のカードの色を動作とともに確かめ、持っていない子どもは視覚的にとらえて確かめることができた。このことは、最初は自信がなくカードを持てなかった子どもが活動に参加できるようになった姿から分かる。

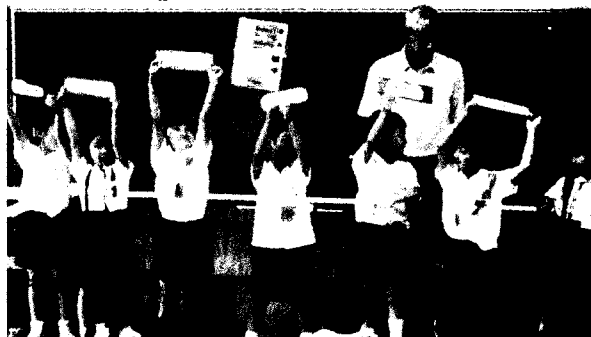


写真2 色カードをあげる活動

次に『Sing A Rainbow』に合わせて教室に掲示した7色の星を指さす活動を行った(写真3)。この活動で子どもは聞いた色を意欲的に探して指さしていた。一斉に色を指さすため、色の表現を確実に分かっていない子どもも友達と関わりながら色を探せた。誤って覚えていた子どもも周りに合わせて指さしているうちに分かる色を増やしていった。



写真3 教室掲示された色の星(上)と指定色の星をさす子ども(下)

これらの2つの活動によって、7色をより確実に分かるようになった。繰り返し色を聞き、何度も発音することによって、子どもは色の表現の学びをより確かな学びとし、次の活動への自信を持てたのである。活用するためには、繰り返し基本表現に触れて知識を定着させることが重要であった。

イ 段階的に発話する場面

欲しい短冊の色を伝えに行く時の基本表現(資料2)をALTとHTで示範した。初めてこの基本表現を聞いた時、子どもは資料3の点線部のような反応をした。それは、一人でALT(HT)に言いに行く自信を持てなかったためだろう。今までの学びによって単語だけなら言えそうだという見通しは持っていたのだが、対話の流れの中で使う自信はなかったととらえる。

Children(C) :	“Hi!”
ALT :	“Hi!”
	“What color do you like ?”
C :	“_____, please.”
ALT :	“Here you are.”
C :	“Thank you.”

資料2 伝えるときの基本表現

その理由としては、4月から本時まで学んだ表現と違い言葉のやり取りが5回も続くことや、色の表現に初めて聞くpleaseがついていたためだと考えられる。さらにALT(HT)に自分から話しかけること自体が初めての経験となる子が半分以上をしめる実態も重なった。活用する知識が明確になっていても、活用する場が不明確であったり不安要素を含んでいたりすると、子どもは知識を十分に活用できないのである。

そこで2回目の示範を行った。その後の反応は1回目の示範に対する反応とは異なり、資料

3の波線部のように変化している。基本表現を繰り返し聞いて日本語での意味を感覚的に分かったようだった。子どもは色の表現ならば聞いて分かるので、その知識をもとに教師がオレンジのカードを受け取る動作と合わせて意味が分かったのだろう。

会話の意味が分かった様子を確認してから、次のALT対子ども全員での発話の段階に入った。一度目のorangeではまだpleaseを言えなくても、次のgreenでは言える子どもも増え、最初の“Hi!”の声も大きくなった。そして、さらに次のALT対子ども一人の段階に入った。最初は数人しか挙手がなかったが、二人目、三人目と繰り返すごとに自分でも言ってみようという思いに変容し挙手が増えた。

練習を重ねる際、単純な反復練習をするよりも段階をおって発話に結びつける方が子どもは自然と知識を活用し、いかに活用するかも分かる。この手だてによって活用がうながされ次の場面につながった。

【本時の活動を確認した後】		C :	“Hi!”
HT :	まず、先生 (HT) とグレン先生でやってみよ。	ALT :	“Hi!” “What color do you like ?”
HT :	“Hi!”	C :	“Orange, please.”
ALT :	“Hi!” “What color do you like ?”	ALT :	“Here you are.”
HT :	“Orange, please.”	C :	“Thank you.”
ALT :	“Here you are.”	HT :	次は green でしてみよう。
HT :	“Thank you.”	C :	“Hi!”
C :	えー。難しい。長いし言えない。	ALT :	“Hi!” “What color do you like ?”
HT :	難しい?では、もう一度言ってみよ。	C :	“Green, please.”
【基本表現の示範 (2回目)】		ALT :	“Here you are.”
C :	<u>あーわかった。言えそう。</u> <u>プリーズがある。</u>	C :	“Thank you.”
HT :	じゃあ、みんなで言ってみよう。 orange 欲しいって言ってみようか。 だけど orange だけでいい?	HT :	一人で言えるかな?
C :	だめです。プリーズをつけます。	C2 :	purple でしてみます。
C1 :	“Orange, please.” です。	C2 :	“Hi!”
HT :	そうだね。みんなで言ってみよ。	ALT :	“Hi!” “What color do you like ?”
		C2 :	“Purple, please.”
		ALT :	“Here you are.”
		C2 :	“Thank you.”
		C3 :	(orange で ALT と会話する)
		C4 :	(purple で ALT と会話する)
		C5 :	(red で ALT と会話する)
		HT :	自分の好きな色言いに来れそう?

資料3 段階的な発話場面

ウ ペアでALT (HT) に伝えに行く場

七夕の時節がら、願い事を書きたい短冊の色を伝えるに行く活動を設定した。これにより、子どもは欲しい色の短冊をもらうために英語で話す必要感を抱いた。しかし、ALTと1対1で話す経験自体が初めての子どもの大半をしめるため不安を感じる子どもが多いと予想し、ペアでの活動とした(写真4)。

資料4は抽出児の記録である。A児は緑の短冊に願い事を書きたいと思ったが、pleaseを付けることが分からず、ALTのところへなかなか足が向かなかった。そこでペアのB児に相談した。B児もはつきりと自信を持っていたわけではないが、pleaseを付けるのかな?と答えたので、二人でALTのところに向かった。そしてALTに欲しい色を伝えて短冊を受け取った。

この後A児は続けてred、blueの短冊をもらいに行き、3つの願い事を書き学習に満足感を持てたようである。この時間のふりかえりには「色の勉強や願い事を書くのが楽しかったです。」と書いた。子どもの多くはA児のように最初は不安感を

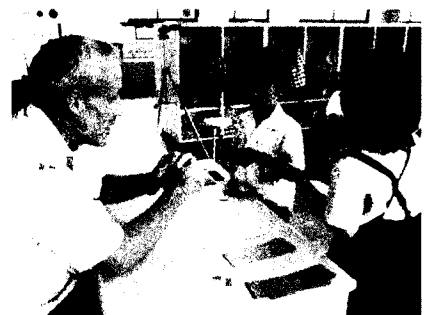


写真4 ペアの活動

A児 :	green の後、何て言うの?
B児 :	green...? please...?
A児 :	“Green, please.” か?
B児 :	そうだよ。
A児 :	“Hi!”
ALT :	“Hi!” “What color do you like ?”
A児 :	“Green, please.”
ALT :	“Here you are.”
A児 :	“Thank you.” やったー。

資料4 A児とペアのB児の記録

抱きながらもペアの子どもと関わったり ALT や HT にうながされたりしながら発話した。

抽出児 C は前時の色の表現を聞いて分かることをねらった授業では、資料 5 の 6/16 ふりかえりのように学習内容に満足感をあまり持てなかった。しかし 6/30 (本時) のふりかえりでは話すことに満足感を持ち、ペアの子どもとかわったよさも自覚している。ペアで協力する場が有効な手だてとなって、発話パターンを数回繰り返した結果、C 児は英語で話せたという満足感を持てたようである。

子どもは ALT と 1 対 1 で話すという活用する場面自体に不安感を抱いていた。しかし、ペアでかわりながら活用することでその不安が解消され、めざす「活用する姿」に至ったといえる。

(6) 成果と課題

本時では 3 つの手だてを講じることによってめざす「活用する姿」が見られた。どの子どもも前時は聞いて分かるだけだったが、本時では自分で色の表現を使って発話したからである。そして、授業の終わりには自分の願い事を書いた短冊の色を最初に歌った『Sing A Rainbow』に合わせて挙げる事ができた(写真 5)。聞いてできるだけだった知識が発話できる知識となり、より明確に色を英語で分かるようになったといえる。「活用する姿」をめざした授業を展開する中で知識創造も充実したのである(資料 6)。

しかし、より自然なコミュニケーションの素地を養うために以下のことが今後の課題としてあげられる。まずは HT が英語で認めたり励ましたりするなどクラスルームイングリッシュを増やすことである。もう一つは ALT と HT の役割を明確にしておくことである。今回の授業では ALT や HT が英語を使う場が少なく日本語での指示や声かけが多かった。英語で “Good!” “Nice!” と声をかけたり、ALT が子どもと関わる場を設けたりする必要があった。特に ALT の役割が少なく、発音を聞かせる役割と短冊を渡す役割だけになってしまった。役割の限定によって本時での基本表現だけしか使えない状況になってしまったのである。いろいろな英語を自然にインプットし、それをいつか子どもが使えるものにするためにも ALT との連携は重要である。

もう一つの課題は、単に英語を発話することから相手意識を持って発話することへの意識づけである。今は自分の思いを一方的に言って満足する姿がほとんどである。しかし今後、相手の目を見て聞いたり話したりするように声かけをするなど、単に英語を使うのではなく子ども同士が相手意識を持ってコミュニケーションができるように工夫していきたい。

これまでに子どもは、基本表現の習得・発話・ふりかえりという授業の流れを経験した。経験を増すごとに英語に慣れ親しみ、最初よりも意欲的にコミュニケーションしようとする姿が増えてきた。これからも英語への興味・関心を高めコミュニケーション能力の基礎を培っていくことをめざす。

前時 6/16

- 話す△ 聞く◎ 関わり◎
- ・色バスケットが楽しかった。英語がうまく話せなかった。



本時 6/30

- 話す○ 聞く◎ 関わり◎
- ・短冊の色を選んで、それに願い事を書いたのが楽しかった。最初はプリーズを言うのを忘れたけれど、教えてくれたから思い出して言えたよ。

資料 5 C 児のふりかえりの姿容



写真 5 歌に合わせて短冊を挙げる

- D 児 短冊をもらう時、少し難しかったです。相手の目を見て話せて良かったです。まだ、英語は話せないです。でも少しできるようになりました。
- E 児 ピンクと紫と黄色の短冊が欲しいと英語で言えました。少し難しかったけどがんばりました。三枚目の黄色の短冊は上手に言えたのでとてもうれしかったです。
- F 児 一番好きな色は紫だったので、短冊の色は一番に紫を選びました。楽しかったからまたしたいです。欲しい短冊の色を言えたからうれしかったです。

資料 6 子どものふりかえり